

熊本における「産業革命」と産業遺産の可能性

— 旧熊本紡績赤れんが工場の熊本学園大学への移築に際して —

幸 田 亮 一

1 はじめに

一世紀以上もの長い間、現役工場として活躍してきた、旧熊本紡績の赤れんが建物の一部が、本年1月に熊本学園大学の正門横に移築され活用されることになった。

「近代化遺産」や「産業遺産」という言葉が聞かれるようになってきたとは言え、まだ、その内容や可能性については知られていないことが多い。そこで本稿では、熊本における「産業革命」というテーマで、熊本における工業化の特徴は何であったのかを振り返りつつ、それとの関連で産業考古学の観点からこの建物がどんな意義を持っているのかについて述べてみたい。

熊本の歴史については豊富な研究蓄積が存在するが、産業史・経営史に関しては手薄な感が否めないし、数少ない研究も熊本の産業史を「後れ」の面に眼を向けて理解してきたように思える¹⁾。その一つの背景に、「重工業」を中心に発展した北九州に比べて「軽工業」中心の工業化をたどった熊本の工業史を劣ったものとみなす見解があり、「軽工業」という言葉に囚われて、事の大切な面を見過ごしたと言えるのではないだろうか。ひょっとすると、大切な事が語り継がれていないのではないだろうか。そのような問題意識も念頭において、繊維工業に縁のある旧熊本紡績建物の移築を契機に、従来とは少し違った視角から熊本産業史を振り返ることを試みたい。

「産業考古学(industrial archaeology)」という新しい知のフィールドについて最初に簡単に紹介しておきたい。もともと、発祥の地はイギリスである。1950年代半ばからの経済成長期に、産業革命時代の建物が次々にスクラップ化されるのを見て、各地のアマチュア史家たちが調査に乗り出したのがきっかけである。1955年にバーミンガム大学の若き歴史家リックス(Michael Rix)が「産業考古学」という用語を提唱し、それ以降、今日に至るまで使われてきている。こうした動きが広がる中で、古い工場や機械を見る人々の目が180度変わり、産業の「遺物」が未来に残すべき「遺産」となったのだ。調査・保存活動は他のヨーロッパの国々やアメリカにも広がった。なお、産業遺産とは、「産業の形成と発展に大きな役割を果たしてきた機械や道具、装置、工場施設、土木建築物、図面、写真などのうち、今日に残されているもの」を指す²⁾。

日本では、技術史や産業史を専門とする学者が音頭を取り、郷土史家や技術者、博物館員、自治体職員など同好の士が集まり、1977年に産業考古学会が誕生した。同学会の地道な努力もあり、徐々に世間にも知られるようになり、「産業考古学」という言葉は『広辞苑』にも収録されるまでになった。最近では、文化庁や経済産業省、農林水産省も産業遺産の重要性を認め、調査や保存関係の予算を計上するようになったし、さらに加えて、このところのレトロブーム

1) 例えば、新・熊本の歴史編集委員会 [1980]などを参照。

2) 馬淵 [2001], 48頁。

や新しい観光の動きに伴って、産業遺産は観光資源として新たな脚光を浴びつつある。

九州では福岡県で石炭産業史などを研究する人々を中心となって「九州産業考古学会」を組織し見学会や例会を開いてきており、今までに産業考古学会全国大会を2度開催している。それに対し、熊本では関心が低かったが、ようやく「熊本産業遺産研究会」が昨年発足したところである。

本論に入る前に、簡単に、赤れんが建物が熊本学園大学に移築されることになった経緯を紹介しておく。つい最近まで月星化成熊本工場として利用された赤れんが工場については一部の人々でその歴史的な重要性は認識されており、熊本県も、平成9年(1997年)から翌年にかけて文化庁の支援を受けて近代化遺産の調査を行った際、月星熊本工場(=旧熊本紡績工場)の重要性を報告書の中で指摘していた³⁾。しかし、民間企業の工場建物であり文化財の指定を受けることもなかった。事態が大きく変化したのは平成13年(2001年)のことで、熊本駅前再開発と絡んで城内にある合同庁舎移転先に月星熊本工場敷地が決まったのである。

このニュースを聞き、筆者は、産業考古学会の一会員としてまことに残念との思いから、熊本日日新聞の10月29日付けの「月星化成熊本工場 明治伝える貴重な遺産」という記事を投稿した次第である。これを機会に「熊本まちなみトラスト」に誘われ、いっしょに保存活用の可能性を議論し、産業考古学会や春日校区まちづくり委員会とも協力して、月星熊本工場の見学会を数度にわたって開催してきた。しかし、月星化成熊本工場は平成14年(2002年)6月末には閉鎖され、半年に及ぶ交渉の後、県による用地買収合意が報じられたのが平成15年

(2003年)2月6日。ただちに、その日まちなみトラストの磯田桂史氏とともに、知事や市長、国土交通省九州地方整備局長などに産業考古学会の小山会長名での保存・活用の要望書を提出するとともに、その後、建物の一部保存を求めて県との交渉を数度にわたって行ってきた。しかし引き延ばされていた解体工事も3月5日にはついに着手され、敷地南側から解体がスタートした。

熊本県と国土交通省の話し合いがつかないまま引き渡し時期が迫る中、ほぼ9割を超える解体が進み、関係者が皆あきらめていた時に、思いがけないところから話が持ち上がった。4月にはいってすぐ、熊本学園大学の事務局より、月星の赤れんが工場の意義についての問い合わせがあったのだ。もし移築されることになれば学園大のためにプラスになると判断し、保存運動を共にやっていた商学部教授の工藤栄一郎氏といっしょにこの建物の重要性を理事会で説明した。まちなみトラストのメンバーもいっしょに事務局への説明にあたってくれた。この結果、北古賀勝幸理事長や坂本正学長、目黒純一事務局長による現地視察を踏まえ、理事会はその価値を認識し、移築・活用の意思決定を下し、いっきょに話が進展した次第である。これによりまさに風前の灯火だった明治期の赤れんが工場の一部が生き返ることになった⁴⁾。

全体から見ると小さな部分にしか過ぎないが、建物が残ったことの意義は、後述するようにたいへん大きいと言える。

2 「産業革命」と熊本—その1 紡績業

ようやく本題に移る。「産業革命」という用語は、1880年代のイギリスでトインビー(Arnold

3) 熊本県教育委員会 [1999] を参照。また、磯田 [2001] は、旧熊本紡績の建物に関して、建築史・産業考古学の立場から詳細に調査し執筆したものである。

4) なお、月星の工場建物のなかで、もうひとつ、明治41年(1908年)に作られた木造平屋建ての診療所も金峰山の山腹に完全復元された。

Toynbee: 1852-83) によって提唱されて以降、いろいろな議論を経ながら今まで使い続けられている。日本語の「産業」は英語のインダストリーを訳したもので、一方では農業も含む広義の使い方があり、他方では工業と同じ言葉として用いられる狭義の使い方がある。また、時代とともに意味が少しずつ変化してきている。近年は、「工業」の代わりに「産業」を用いることが増えており、例えば、かつては「自動車工業」と呼ぶことが多かったのが最近では「自動車産業」と呼ぶことが多くなっている。用語についてあれこれ詮索するのがここでの課題ではない。以下では、狭義の工業と同じ意味で、ほぼ第二次産業と同じ意味で用いるが、時には農業も含めて考える場合もある、そのような柔軟な概念として用いることとする。

「産業革命」とは、とくに製造業において、道具を用いる手工業作業場から機械を用いる近代工場へとモノづくりの方法が代わり、その結果、社会の仕組みが大きく変わることを指す。西洋経済史の世界では、第一次産業革命、第二次産業革命、第三次産業革命と使うことが多い。その用語法に倣い、結論を先取りする形で言うと、熊本の場合は、第一次と第二次産業革命は1890年代から1920年代にかけて同時にしかも緩慢に経験したと言えるであろう。第三次産業革命は今進展中である。

では、熊本の産業革命の中身は何であろうか。それは、イギリスの産業革命が繊維工業から起こったのと同じく、繊維工業を中心としたものであった。具体的には、綿紡績業と蚕糸業である。

熊本での製造業の歴史には他地域に比べて特に際だったものは見いだせない。いわゆる伝統工芸と呼ばれる分野でも他県に比べて地道であっ

たことは、経済産業省によって指定された伝統工芸を熊本県は近年に至るまで、北海道、千葉県と並んで持っていなかったことにも示されている。しかし、これは決して熊本にモノづくりの伝統がなかったことを意味しない。小袋焼などの陶磁器業、人吉・川尻の鍛冶業、八代の和紙、来民の団扇、山沿いの地方での竹細工・木工細工など各地にモノづくりは脈々と受け継がれてきた。藩政期にも第6代藩主、細川重賢による「宝暦の改革」の時、養蚕を含む殖産政策が行われた。その時の養蚕・蚕糸業の中心地は矢部で、太田忠助のリーダーシップのもとに全国的に見ても先駆的なマニュファクチュア経営が誕生したほどである⁵⁾。

しかしながら、幕末に長崎を通じて西洋技術が紹介されてきた時、いち早くそれを取り入れる試みを行ったのは、佐賀や鹿児島で、残念ながら熊本ではわずかに御船の増永三左右衛門が大砲の鑄造を行ったに留まる。しかし、実際の技術導入では後れをとったものの経済思想としては際だった進歩性を示した。それが「堯舜孔子の道・西洋器械の術」という名言に象徴される横井小楠の実学の思想である。小楠の弟子達が熊本の政治の実権を握ったのが明治3年(1870年)で、それからめざましい殖産興業政策がスタートする。その時、重視されたのが製茶と製糸である。小楠の甥を通じて招聘されたアメリカ人のジェーンズ(Leroy Lansing Janes: 1838-1909)による熊本洋学校もその一環に位置づけることができる。彼が洋学校で講義したノートが『生産初歩』として残されており、その中でジェーンズが熊本での産業振興の重点として指摘しているのが米・茶・絹である⁶⁾。

実は、熊本学園大学が立地する大江は実学党

5) 熊本県蚕糸振興協会 [1980], 52-53頁を参照。「製糸業が養蚕から独立してマニュファクチュアとなることは最もおくれた。肥後において明和三年(一七六六)養蚕業太田忠助が女子二〇~三〇人を雇い集めて糸を繰らせたというのがもっとも早い例である。／幕末になって座繰製糸の発明、普及にもとづいて製糸マニュファクチュアが本格的にはじまった」(内田 [1960], 105頁)。

6) これは、新熊本市史編纂委員会 [1997] に収蔵されている。

の人々の活動にとって重要な土地である。学園大正門から徒歩7, 8分のところに徳富記念園がある。ここは徳富兄弟の父、徳富一敬が大江義塾を建てたところであり、河田精一による織布工場があったところである⁷⁾。また、今のダイエー熊本店は、地場系製糸資本を代表する熊本製糸株式会社の主力工場が立地していたところである。さらに、西に足を延ばせば昔の本山村に至るが、ここはかつて竹崎茶堂ら実学党の有力者が居を構え、先進的な取り組みを行ったところであり、その様子は木下順二の『風浪』にいきいきと描かれているとおりである。

この時代に、士族の中で地域の指導的人物が率先して新しい事業に乗り出したことに大きな意味があった⁸⁾。経営学という企業家活動である。県下各地において、実学党の人々が競って製糸業や茶業に乗り出していくと、実学党ではない士族たちもその影響を受けて各種の事業に乗り出した⁹⁾。

このような中で、明治20年代半ばには最大級の事業計画がもちあがった。事業のアイデアを考えたのは、熊本の士族出身で、実学党ではないがその影響を受けつつ早くからビジネスの世界に飛び込み成功を収めていた下田耕造¹⁰⁾である。彼は八代地方で盛んであった綿花栽培を近代工業と結びつけて大規模な紡績工場を作る事業プランを練り上げたと言われている。こ

れに、岡崎唯雄や美作宗吾、清永宇蔵らの熊本の商人たちが参加し熊本紡績株式会社の創立を県知事に対し届け出て明治26年(1893年)に5月17日に創立認可を受けた。

ちなみに、明治26年は長野藩平・関吉によって熊本製糸合資会社が設立された年でもあり、紡績・製糸の重要な基盤が整えられたということで、熊本の産業革命を考える場合とくに大きな意味を持つ年であった。これに、県内資本ではないが日本セメントの八代工場が明治22年(1889年)に、九州最初のセメント工場として、全国的にも早い時期に建設されたことを付け加えると、熊本の産業革命は、時期として全国的にけっして後れをとったわけではないと言うことができよう。

ここで日本の紡績業史を簡単に振り返っておくと、幕末に鹿児島で嶋津斉彬の指導のもと集成館事業の一環として鹿児島紡績所が作られたのが文久3年(1863年)。その後、明治政府主導でいくつかの先駆的紡績工場が作られるが、まだ日本の紡績工場は一人歩きするには至っていない。原料と機械、技術者に問題があったからである。紡績業が日本に定着するきっかけとなったのは、明治13年(1880年)の渋沢栄一のリーダーシップによる大阪紡績の設立からで、その成功が刺激となって各地に紡績工場が設立されるようになる。九州では、明治17年

7) 河田精一の妻みつ子は徳富蘇峰・蘆花の姉にあたり、妻の父、徳富一敬が大江村の自宅に建てた絹織工場の経営に参加し、その後、熊本の絹織物業の発展に一生を費やした(新熊本市史編纂委員会 [2001], 219-223頁を参照)。

8) 東畑精一は士族の役割を次のように指摘している。「旧藩体制のなかにあつて旧武士階級が永い間に練られてきた訓練、彼らの頭のなか蓄えられてきた習熟、これらによって培われてきた彼らの意識、メンタリティ(心性)、才能などは、局面を転じて資本制の新社会においても、依然として昔のままの水準を保つことができた。しかもそれらは新しい種類の経済活動をなすのには最も必要なような性質のものであつた。」それに続けて、具体的には「組織力」と「冒険心、探検心、敢行心、企業心」の2つを挙げている(東畑 [1964], 64-66頁)。

9) 花立 [2000] を参照。

10) 下田耕造(1845-1920年)は、現熊本市に生まれ、西南戦争後、熊本で最初の洋品店を開業し、さらに麦稗真田の工場も経営した。熊本紡績の他にも、競商場や米穀取引所、力食社などの設立にも関与し、熊本商工会議所の第二代会頭も務めた企業家精神に富んだ人物であった(熊本県立商業高等学校 [1956], 123-126頁を参照)。

(1884年)に長崎紡績所、明治24年(1891年)に三池紡績と久留米紡績が開業している。こういう全国的な流れのなかに熊本紡績も誕生したわけである。

熊本紡績の話に戻ると、この建物は下山秀久¹¹⁾によって設計され、岡山の石田金十郎によって施工された。明治28年(1895年)3月5日に、社長に志水茂次郎、支配人に下田耕造、監査役に山内栄作をあてて資本金15万円で開業した当時の設備は、蒸気機関、ボイラーなどの動力機に加えて、ドブソン・バロー社(Dobson & Barlow)製のリング紡績機4608錘であった。これは、蒸気機関からローブレスを経由して天井近くのシャフトからベルトを経て紡績機械を動かす、という産業革命を代表する機械体系が熊本の地にも一挙に導入されたことを意味した。その意味で、熊本の産業革命の象徴的な出来事であった。翌明治29年(1896年)7月には15万円増資し、資本金30万円となり、5760錘を増設し、合計1万368錘の規模に拡大している¹²⁾。

熊本紡績はその後、厳しい競争のなかで生き残りをかけて、明治32年(1899年)7月、久留米紡績、三池紡績とともに九州紡績株式会社に合体し、工場は同紡績熊本工場となった。九州紡績は「全国屈指の大規模な紡績会社」¹³⁾の誕生を意味し、順調にいけば日本の紡績工業史は少し違った歴史を歩むことになったかもしれない。しかし、残念ながら大阪出張店長、守山又三による大損失事件をきっかけに経営が悪化し、

初代取締役会長の野田卯太郎は引責し、その後の二代目に下田耕造が就任し事態の收拾をはかった。だが尽力及ばず、明治35年(1902年)10月には三井財閥系統の鐘淵紡績に吸収されてしまい、熊本工場も鐘紡熊本工場と再出発することになった¹⁴⁾。

鐘紡熊本工場には多くの女性労働者が働いた。注目すべきは女性史研究者の高群逸枝が大正2年(1913年)に紡績工女として鐘紡熊本工場で4カ月の経験を送っていることである¹⁵⁾。

この工場が次の大きな転機に遭遇するのは太平洋戦争中のことだ。原料の綿花不足のなか国策として企業統合が行われる中、鐘紡も熊本工場を閉鎖することになり機械は撤去された。この休止工場を借り受けたのが久留米の日華護謄工業で、昭和17年(1942年)に熊本工場の操業を開始した。その後、同社は社名を月星ゴム、月星化成と変えて半世紀以上、赤れんが工場を維持し使い続けた¹⁶⁾。

3 「産業革命」と熊本—その2 製糸業

熊本紡績(株)の設立は西洋近代技術を熊本にいきよに導入するという意味で画期的なものであった。だが、それはヨーロッパの各地や日本でも中京や北陸で見られたように繊維機械工業などの関連工業を生み出すことはなかった。熊紡を継承した鐘紡も、熊本において雇用面を除くと積極的に地域と関わることなく、工場は高い塀に囲まれた別世界のままであり続けた。

11) 下山秀久は工部大学校を卒業した機械工学者で、それ以前に三池紡績などで雇われた経験を持っている。第五高等学校教授として熊本に来て、その時、熊本紡績のスタートに技術者として関与した。その後、米沢高等工業学校の校長に着任し熊本を離れるまで長く熊本高等工業で学生の教育にあたった。下山秀久は熊本時代に英国に留学した際に詳細に記録した日記をつけており、それをもとに孫の柴田寛氏がまとめたユニークな著作が、柴田 [2000] である。

12) 西日本文化協会 [1985], 30頁を参照。

13) 西日本文化協会 [1985], 9頁。

14) 岡本 [1993], 第6章を参照。

15) 高群 [1974], 182-185頁を参照。

16) 創業者、倉田雲平の曾孫にあたる倉田雄平氏がいま熊本で「つちやゴム株式会社」というベンチャー企業を営み注目を浴びている。

綿紡績業と異なり、明治末から第二次大戦後に至るまで、労働力だけでなく原料確保でも地域と密接な関連をもって、熊本の産業構造に大きな影響を及ぼしたのは蚕糸業¹⁷⁾の方であった。

既述のように、熊本では士族が中心になり製糸業をスタートさせた。初期の注目すべき試みは、横井小楠の高弟によってなされた。すなわち、熊本県蚕糸業の始祖と称される長野濬平がその中心人物である。彼は明治2-3年(1869-70年)にかけて3度、甲武上信の蚕糸業を視察し帰熊した。ちょうど実学党が熊本県政を掌握した直後であり、県の産業振興について、次のように答申建議している。

- 一、大に荒蕪を開発して以て桑樹を栽植すべし。
- 一、管内の有志を募り、之を上信奥羽の諸州に派遣して蚕事を学ばしむべし。
- 一、得業の士は之を管内に派出し各地に養蚕伝習所を創立すべし¹⁸⁾。

これに基づき、伝習生12名に官吏3名の計15名が、本州の先進地に派遣され新しい技術を学んで帰ってきた。それを受け、託摩郡九品寺村など県下10カ所の養蚕試験所が設置され、長野濬平が全体を統括した。明治5年(1872年)に、濬平の養子である親蔵夫妻が、わが国の機械製糸の先駆者である、前橋の速水堅曹の下で新技術を学んで、教婦の大野なみを同伴して帰熊し、九品寺の養蚕試験所に製糸機械3座を設置し工女7名で繰糸を開始した。これは関西以西における最初の機械製糸の試みであった。この事業は順調に拡大し、明治7年(1874年)には機械16座、工女50人の規模になったが、資金繰りに加え台風による建物全壊被害でせっかくの努力が中断されてしまった。

この惨状を聞き及び事業の継続に力を差し出したのが同じ小楠門下の嘉悦氏房であった。この呼びかけに応じて、嘉悦信之や郡豊水など120名の熊本藩士族が参加し、資本金1万円の株式会社緑川製糸場が、社長に嘉悦氏房を、支配人に長野親蔵を据えて設立された。工場は、現甲佐町豊内の鮎梁場に隣接した土地に、総建坪323坪の工場建物、機械34座、工女67人、男工13人をもって、水車を動力として明治8年(1875年)6月にスタートした。事業は比較的順調な滑り出しを見せ、明治11年(1878年)には煮繭操糸場用に蒸気汽罐を据え付け、釜数72、工女92人の規模にまで拡大した。これは、手繰や座繰という技術では一人の作業者が繰り糸以外にたくさんの仕事を処理しなければならなかったのに対し、作業者が主に繰り糸に専念できるという点で進んだ技術をもった機械式の製糸工場であった。しかし、西南戦争による混乱や、ライバルとしての熊本県勸業場の設立、さらに松方正義による長野親蔵の引き抜きによって、経営危機に陥り、明治15年(1882年)には解散させられてしまった¹⁹⁾。経営的には失敗であったが、九州における機械製糸工場のパイオニアとして、人材育成機関としてこの会社が果たした役割はまことに大きなものがあつた。この努力の延長上に、明治26年(1893年)に長野濬平・関吉親子によって合資会社熊本製糸が設立され、熊本を代表する製糸会社として発展していくことになる。

さて、熊本において養蚕・製糸業が本格化するのには農民たちが養蚕に熱心に取り組みはじめた明治30年代からである。熊本では実学党系の熊本製糸と、そのライバルで学校党系、細川家系の肥後製糸が両雄となり、各地に製糸工場が次々に設立されていった。

17) 日本の蚕糸業についての研究書として、石井 [1972]、中林 [2003] を参照。また、最近ドイツで出た Brötzel [2002] は、改めて世界史的観点から東アジアの蚕糸業の役割を明らかにした労作である。

18) 米村 [1955]、27頁。

19) 緑川製糸に関しては、米村 [1955]、30-40頁を参照。

一例をあげると、筆者が生まれ育った現中央町の堅志田は、かつて明治時代には一時的に下益城郡役所がおかれたこともある一大集落で、下益城の繭集荷のひとつのセンターとして栄えたところである。ここは、先の緑川製糸場の設立に参加し、後には県会議長、衆議院議員も務めた嘉悦信之が住んでいたところであり、その息子の英輝によって、25釜を設置して明治36年(1903年)に嘉悦製糸場が創業され、一時は順調であったが、間もなく経営が行き詰まり、家産を傾け一家離散という結末を迎え、結果として新聞に以下の広告が掲載されることになった。

広告 下益城郡中山村堅志田元嘉悦製糸場建物十一棟此建坪四百九十五坪敷地壱千三百五十八坪 機関式二十馬力 インジン六馬力 オーシントンポンプ 製糸機械六十六臺外乾燥室製糸工場に要する附属器具備品一切 右全部又は一部売却す 希望の方は御來談若くは御照会を乞ふ 下益城郡中山村大字馬場米田義一²⁰⁾

このような失敗も数多く生み出しつつ、養蚕業・製糸業は熊本で急速に発展し、熊本は西日本最大の養蚕・製糸県になる。そして大正時代には、地元資本に加え、片倉、郡是、鐘紡などの大手資本も熊本に進出し、表1に見られるように、大正14年(1925年)には35の製糸工場が立地し、釜数の合計は4287に達するまでになった²¹⁾。工場の増加は原料繭の激しい争奪戦をもたらした。それは指導的養蚕農家の買収から有力政治家の介入に至るまで、実に激しいものであった。その後昭和に入ると世界恐慌やナイロンの発明などにより蚕糸業は大きな影響を受け、製糸工場と養蚕農家の関係も変化しなが

ら戦時経済、終戦、戦後復興と展開していく。

その経緯をここで仔細に検討するのは本稿の課題を超えることであり、ここでは一つの素朴な疑問を提起しておくに留める。それは、熊本は伝統的に農業県だとよく言われるが果たしてそうなのであろうか、という疑問である。熊本県蚕糸業の歴史を振り返る作業を行う中、決してそうではないとの思いを強くした。

蚕糸を作り出す方法には、手挽きから座繰り、機械製糸まで幅がある。農家は長い間、くず繭などを利用して自分で糸を挽いていた。再び身近な事例を挙げると、筆者の母方の里は先の緑川製糸の工場が立地した、甲佐町の豊内で代々農業を営んできた家である。昭和5年に母が生まれたころは自作地の他に若干の小作地を人に貸していたくらいの、米作と養蚕を主とする農家であった。母の話によると、筆者の祖母は養蚕の時期にいつも糸を挽き、それを自分で染め、織機を使い布地にするまで全てをこなしており、自家用に加え親戚へ贈答品として配っていたそうである。わずか半世紀前までは至るところで、農民的な技術が継承されていたわけである。「百姓」というのは百もの仕事をこなすからそう呼ばれたと言われるが、母の話からまさにそれを実感した次第である。

話をもとに戻し、ここで言いたいことは、養蚕にしる製糸にしる高度の技術の集積を必要としたということである。生糸は長い間、日本の外貨獲得の主力商品であった。京都大学名誉教授の渡辺尚氏は、ヨーロッパの資本主義発展における綿の役割を「原商品」²²⁾と呼んでいるが、それにちなめば熊本の資本主義発展にとって生糸こそ「原商品」であったと言えるであろう。あるいは明治大学の安部悦生氏の言葉を借りるならば「戦略商品」²³⁾であった。それだけに厳

20) 『九州日日新聞』明治42年10月13日。この記事は磯田桂史氏のご教示による。なお、嘉悦製糸については、米村 [1955]、115頁を参照。

21) 米村 [1955]、175頁を参照。熊本の蚕糸業は「産業集積」の観点からも改めて研究する必要があるだろう。

22) 渡辺 [2000]、3頁を参照。

23) 安部 [2002]、20頁を参照。

表1 熊本県の製糸工場（大正14年（1925年））

製 糸 場 名	所 在 地	釜数	起業年	備 考
熊本製糸株式会社	熊本市大江町	240	明治26	—
肥後製糸株式会社	熊本市内坪井町	302	明治29	現神戸生糸肥後工場
株式会社肥後蚕糸組	熊本市内坪井町	52	大正9	後、花園町に移転昭和初期閉鎖
株式会社松岡製糸場	熊本市春竹町	108	大正9	昭和15年製糸業企業整備により閉鎖
島崎製糸場	熊本市島崎町	210	明治29	昭和初期閉鎖
尾沢組熊本製糸場	飽託郡白坪村	420	大正6	現、片倉熊本工場
不知火製糸株式会社	宇土郡不知火村	100	大正10	現不知火製糸は戦後復活経営者交代
高瀬製糸株式会社	玉名郡弥富村	120	明治45	閉鎖年月不詳
肥後製糸玉名工場	玉名郡弥富村	156	明治44	閉鎖年月不詳
肥後製糸木葉工場	玉名郡木葉村	100	明治41	現熊本繭織維木葉工場
玉東製糸株式会社	玉名郡江田村	120	大正7	現城北製糸
肥後蚕糸組関製糸場	玉名郡伊倉町	64	明治31	閉鎖年月不詳
山鹿製糸場	鹿本郡大道村	100	明治41	昭和15年企業整備
来民製糸場	鹿本郡来民町	80	大正6	昭和17年企業整備
鹿本製糸株式会社	鹿本郡山鹿町	124	大正3	—
保証責任八幡製糸信用販売購買生産組合	鹿本郡八幡村	120	大正7	閉鎖年月不詳
保証責任製糸販売購買生産組合大正社	鹿本郡三岳村	60	大正8	閉鎖年月不詳
保証責任鹿本中央製糸販売購買生産組合	鹿本郡米田村	60	大正10	閉鎖年月不詳
植木製糸株式会社	鹿本郡桜井村	60	不詳	昭和15年企業整備
有限責任製糸販売購買生産組合泗水社	菊池郡泗水村	231	明治43	現株式会社泗水社
菊池製糸場	菊池郡菊池村	120	明治41	現鐘紡菊池工場
保証責任菊池製糸信用販売利用組合菊水社	菊池郡隈府町	100	大正7	閉鎖年月不詳
肥後蚕糸組千知波製糸場	菊池郡隈府町	50	明治40	閉鎖年月不詳
東肥製糸株式会社	菊池郡隈府町	50	大正10	閉鎖年月不詳
甲佐製糸株式会社	上益城郡甲佐町	80	大正7	現酒六甲佐工場
杉田製糸場	上益城郡御船町	120	大正4	昭和9年閉鎖
肥後製糸益城工場	上益城郡木倉村	80	大正10	閉鎖年月不詳
島崎製糸木山工場	上益城郡広安村	100	大正10	昭和15年企業整備
松岡製糸場	下益城郡杉上村	119	明治36	閉鎖年月不詳
肥後製糸豊田工場	下益城郡豊田村	116	明治40	閉鎖年月不詳
長谷川製糸場	下益城郡小川町	34	大正7	現郡是小川工場
隈庄製糸合名会社	下益城郡隈庄町	41	大正9	閉鎖年月不詳
吉野製糸合名会社	八代郡吉野村	160	明治38	閉鎖年月不詳
球磨製糸株式会社	球磨郡大村	82	大正6	閉鎖年月不詳
天草製糸株式会社	天草郡亀場村	208	大正8	閉鎖年月不詳
合 計 35 工場		4287		

（出典：米村 [1955]，175-177頁。なお、備考欄は1955年当時のことである。）

しい品質管理を要求され、農家では、蚕種（蚕の卵）から蚕、蛹、繭に至るまで、温度管理から餌である桑の葉の質に至るまでたいへんな注意を必要とした。もちろん、製糸工場では細くて高品質の糸を作るために厳しい管理を行ったのは言うまでもない。

従来、製糸工場における長時間で過酷な労働環境については『女工哀史』ほかいろいろな文献で指摘されているとおりである。紡績も含めて若い女性労働者の大きな犠牲により外貨を獲得し機械や兵器を購入して工業化と軍事化を押し進めたのが日本資本主義の歴史であった。これが学生時代に筆者が教えられたことであり、この認識は長いあいだ変わらなかった。

しかし、産業技術の歴史、とりわけ玉川寛治氏による繊維技術史に関する最近の研究²⁴⁾から製糸工程の具体的な技術について詳しく知ることができたのをきっかけに、労働者や農民に蓄積された高度の熟練と技術力のことも考慮に入れる必要があると思うに至った次第である。さらに、横井小楠の研究者として知られる山崎益吉氏が明治の製糸業従事者にみられた「エートス」に着目していることにも刺激を受けた²⁵⁾。

このような視点から熊本の産業史を振り返ると、熊本には民衆レベルでのモノづくりに関する高いマネジメント能力が蓄積されてきた、ということができるのではないだろうか。ここで言うマネジメントというのは、決して会社の管理技術のことに留まらず、家業や地域の様々な取り組みにも通用する広い意味での用語法である。明治以降の農業経営は世界経済の変動にさ

らされ不安定な要素が強い中で、養蚕から柑橘類や果物、畜産とその時代にあった対象を取り入れ、自然という相手と対話しつつ経営を続けてきて今日に至っている。これはもっと高く評価すべきことであろう²⁶⁾。イギリスでも産業革命は農業革命を引き起こしたが、熊本でも産業革命という用語を使うとすれば、農業経営の世界経済への組み入れとそれに伴うマネジメント力の向上という視点も付け加えるべきではないだろうか。今はマネジメントという用語が農業以外の産業を念頭に思い浮かべてしまうが、このような視角も必要だと思う。

1950年代後半からの高度成長期に熊本から多くの中卒者、高卒者が関東・中京・関西へと集団就職で移り住んでいった。その人たちが重宝された一つの背景に、小さい時から農作業を手伝うなかで、近代的なマネジメントを受け入れる力、さらに現場で工夫・改善する力が形成されていた、ということがあったのではないだろうか。有名な事例として、生産管理の分野で全国的に知られているエピソードをあげよう。これは、特定の間隔ごとに不良品が増加する事態に直面した熊本のある半導体製造工場において、技術者では解決できず、現場のQCサークルでこの問題を取り上げたら、一人の若い女性労働者が工場の近くの線路を走る列車との関連を指摘し、それによって解決したという話だ。

熊本の場合、民衆レベルの改善力に対比して、時代の変化に対する製糸資本の対応力に問題があったと言えるのではないだろうか。今も工業が栄えているところを世界的に眺めて見ると、

24) 玉川 [2001] 年, 玉川 [2002] を参照。「平均女工の社会的平均賃金が社会から与えられているという条件のもとで、操糸女工が、自覚的に働く意欲を持続して働き、長く勤続した方が他の工場に移るより有利だと考えられるような出来高賃金制を、製糸資本は企業の命運をかけて練り上げたのではないだろうか。／操糸女工を、強制・叱責・抑圧など奴隷的な扱いだけにたよっては、長時間高い集中力を維持して働かせることはできない。労働者の自覚的な取り組みが必須の条件となる」(玉川 [2002], 107頁)。

25) 山崎 [2003] を参照。

26) 「養蚕は、早朝から深夜まで四〇日近く働き続ける、肉体的にきつい仕事であったばかりでなく、与えた桑を蚕ができるだけ多く食べ尽くし、多くの繭をつくらせるために科学的管理が欠かせなかった」(玉川 [2002], 168頁)。

フランスやイタリアはもとより、日本の関東・中京・関西のように、繊維工業がその後の工業発展の基礎をなしたという地域がたくさん見いだされる。最も有名なのは豊田佐吉による織機からスタートして豊田喜一郎の自動車へと展開したトヨタの事例である。これに比べ、熊本ではせっかく多くの繊維工場が立地しながら、他の工業への波及が弱かったのはなぜかという問題を、改めて検討してみる価値がある。

ようやく、いま半導体産業を中心に熊本にも産業の集積がみられるようになったが、それを支える現場の改善・工夫活動のルーツの一つは養蚕・製糸業にあるといったら過言であろうか。

4 産業遺産の可能性

ここで、本学に移された赤れんが建物を含めて、産業遺産をなぜ残すのか、どんな可能性を持つのかについて述べておきたい。

まず第1に、地域の産業活動・企業家活動の記憶を継承するきっかけを与えるという意義がある。東京大学の鈴木博之氏が近代建築遺産について指摘している「記憶の契機」と「想像力の契機」²⁷⁾という言葉はそれを端的に表現している。今回移築された赤れんが建物は旧熊本紡績の建物であり、製糸工場の建物ではないが、赤れんが建物は官営富岡製糸場を連想させるものであり、熊本における製糸業の記憶を呼び覚ましてくれる建物である。もちろん、シューズ工場としての半世紀の歴史も熊本工業史の重要なひとこまとして忘れられないことである。

この建物はまた、熊本における企業家活動について思いめぐらす契機を与えてくれる²⁸⁾。深い学識を持ち世界事情に通じた傑出した思想家、横井小楠を持ちながらも、肥前や薩摩に比べて

殖産興業政策に後れをとった熊本は、ようやく明治3年(1870年)の実学党による県政掌握後、積極的な殖産興業政策に転じ、それに刺激を受けた熊本経済人が設立した最大の企業が明治26年(1893年)の熊本紡績であった。その前には、明治24年(1891年)に九州鉄道が熊本へ開通するなどインフラの整備も進んだ。ちなみに、この九州鉄道(株)の設立にあたってリーダーシップを発揮したのは、横井小楠の高弟で、当時、福岡県令を務めていた安場保和である。

第2に、熊本・九州さらに全国の産業遺産とのネットワークの一環としての可能性である。この建物は赤れんがの建物である。わが国で建築材料としてれんがが使われたのは、幕末から関東大震災頃までのほぼ半世紀の間に限られる。銀座に赤れんが街ができたり東京駅が赤れんがで作られたりしたのがその時代の象徴的なことである。熊本でも明治10年代より赤れんがの構築物が作られるが、その中で今も残っているのは、五高や熊本高等工業の建物、熊本地裁などの建物やトンネル、橋梁くらいである。建物としては五高本館が造られたのが明治22年(1889年)。熊本紡績の建物はそれにつぐ熊本の赤れんが建築物である。熊本学園大学産業資料館は、熊本に留まらず九州、全国のれんが建築物とのネットワークで結ばれることになったのである。

これに関連して、産業遺産と観光の関係について簡単に触れておく。観光資源として、最近新たな関心を浴びているのが近代化遺産、産業遺産である。これらを活用した観光ということで、「産業観光」という言葉がJR東海会長の須田寛氏によって提唱されている。須田氏によると、産業遺産と現役工場とを組み合わせることによって、新しい体験型・少人数型の観光の

27) 鈴木 [2001], 78頁を参照。

28) ちなみに、筆者がこれまで従事してきたドイツ経営史に関して言えば、各地に経済資料館が存在する。商工会議所が主体となっている場合も大学の研究所となっている場合もある。熊本でもそろそろ県単位で企業家活動の足跡を体系的に集める作業に着手すべき時期にきていると思う。

可能性が大きく広がるとのことである。これはシュンペーターの言う、経営資源の古い組み合わせの破壊とその新しい創造的な組み合わせということで、まさに「イノベーション」の一つということができよう。昨年10月に、鹿児島で第3回全国産業観光フォーラムが開かれた。鹿児島県や鹿児島商工会議所、島津興業などたいへんな力を注いでいるのが産業観光なのである。鹿児島だけではなく、長崎、福岡も力を入れ観光振興の重要な資源として位置づけパンフレットの整備などに努めている。

実は、いま世界的にも産業遺産への関心が高まっている。イギリスにある世界産業遺産保存会議はユネスコと協力して世界遺産の制定に力を持っているところで、すでに欧米で紡績工場などを世界遺産に指定するなどの実績を生み出している。そのスミス(Stuart Smith)事務局長が一昨年秋に九州を訪れ、北九州、長崎、鹿児島を回った後で一つの報告書をまとめた。ここでは、ばらばらではなく九州が一体となれば世界遺産の可能性があると指摘されている。実際、既述のように福岡や長崎、鹿児島は熱心に産業遺産の可能性を探っている。それに比べて、熊本は対応がきわめて遅い。明治維新の時の後れをまた繰り返すつもりなのであろうか。熊本は、万田坑や三角西港、通潤橋、霊台橋、熊本大学工学部資料館など国指定の重要文化財となっている産業遺産が多数存在する県である。ただ、それぞれがばらばらに存在していて、お互いどうしや他の観光資源とのネットワークがうまくできていないのが現状なのである。

日本の明治期紡績工業ならびに地域産業史の貴重な証人である熊本学園大学産業資料館は、そのようなネットワークの中で重要な役割を果たす可能性を持っているのではないかと思う次第である。

第3に、まちづくりにも大きな役割を果たすということである。熊本をより魅力ある都市に

していくためには歴史的建物の有効活用が不可欠である。その意味でも熊本紡績の建物が残ったということ、それが熊本産業史のなかで重要な意味をもち、多くの学生が集う大江・九品寺の地に移されたことの意義は大きなものがある。大学の知的財産と若者の活力、地域の歴史がうまくかみあって新たなものを作り出していく契機になるのではないだろうか。

5 おわりに

明治期赤れんが建物には独特の存在感がある。この度、学園大に移築された旧熊本紡績の電気室もコンパクトながら、工場建物としては極めて珍しく、軒下やコーナーのれんがが積みに独特のデザインが施されている粋なれんが建築物である。歴史を振り返ると、熊本に産業革命の息吹をもたらした建物であり、熊本の産業史が繊維工業によってリードされたことを思い起こさせてくれる建物である。

今後、研究が遅れている熊本の製糸業史について、労働者や管理層の技能形成の問題を含め、技術史や産業考古学の最近の成果を踏まえつつ、本格的な研究を推し進める必要がある。さらに、諏訪地方などに比較し、ハイテクへの製糸業の対応が後れたのはなぜなのか、イノベーションがうまく現れなかったのはなぜなのか、という問題も検討する必要がある。石炭と鉄で栄えた北九州だけが工業発展の典型的な歴史パターンでは決してない。むしろ、地下資源依存型の工業地域が技術変化によって急速に衰退するのに対し、繊維工業の伝統を持つ地域が柔軟でしぶとい工業発展の可能性を持っているということは、ヨーロッパ各地の事例が教えてくれるところである²⁹⁾。熊本は、横井小楠の教えをもとに繊維工業を中心に工業発展の道を歩んできたことにもっと誇りをもって良い。実学党のベンチャー精神や民衆の知恵など、語り継ぐべきことは豊

29) 大陸ヨーロッパにおいて繊維工業が機械工業の母胎となったことについては、幸田 [1996] を参照。

富に存在する。

熊本産業史の再検討は、単に過去の話に留まらず、熊本という地に蓄積された産業の「知」と「技」を再確認し、今後の熊本の産業発展に活かしていくものになるはずだ。地域の工夫・改善の努力の歴史はベンチャー企業育成や企業誘致に際しても強力な武器となるに違いない。

新しい命を吹き込まれたこの建物が、熊本の発展のために貢献していくことには確信をもっている。ただ、そのためには多くの人々の支援と知恵の結集が必要である。

使用文献一覧

安部悦生 [2002], 『経営史』日経文庫。
石井寛治 [1972], 『日本蚕糸業分析』東京大学出版会。
磯田桂史 [2001], 「月星化成(株)熊本工場 一旧熊本紡績一 に関する調査報告」『産業考古学』102号。
内田星美 [1960], 『日本紡織技術の歴史』地人書館。
岡本幸雄 [1993], 『地方紡績企業の成立と展開』九州大学出版会。
熊本県教育委員会編 [1999], 『熊本県の近代化遺産(熊本県文化財調査報告第182集)』熊本県教育委員会。
熊本県蚕糸振興協会編 [1980], 『熊本県蚕糸業史』熊本県蚕糸振興協会。
熊本県立商業高等学校編 [1956], 『肥後商工先達伝』熊本県立商業高等学校。
幸田亮一 [1996], 「中央ヨーロッパの企業発展」(渡辺尚・作道潤編『現代ヨーロッパ経営史』有斐閣)。
柴田寛 [2000]『機械屋の見た明治の西洋』, 朱鳥社。

新・熊本の歴史編集委員会編 [1980], 『新・熊本の歴史6』熊本日日新聞社。
新熊本市史編纂委員会編 [1997], 『新熊本市史 史料編 第6巻 近代I』熊本市。
新熊本市史編纂委員会編 [2001], 『新熊本市史 通史編 第5巻 近代I』熊本市。
鈴木博之 [2001], 『現代の建築保存論』王国社。
高群逸枝 [1974], 『火の国の女の日記(上)』講談社文庫。
玉川寛治 [2001], 『繊維産業』(中岡哲郎他編『産業技術史』山川出版社)。
玉川寛治 [2002], 『製糸工女と富国強兵の時代』新日本出版。
東畑精一 [1964], 『日本資本主義の形成者』岩波新書。
中林真幸 [2003], 『近代資本主義の組織』東京大学出版会。
西日本文化協会編 [1985], 『福岡県史 近代史料編 綿糸紡績業』福岡県。
花立三郎 [2000], 『明治の青年(上)(下)』熊本日日新聞社。
馬淵浩一 [2001], 『IT時代の産業技術博物館構想』, 玉川大学出版部。
山崎益吉 [2003], 『製糸工女のエートス』日本経済評論社。
米村武夫 [1955], 『熊本県蚕糸業史』熊本県蚕糸振興協会。
渡辺尚編 [2000], 『ヨーロッパの発見』有斐閣。
Brötel, Dieter [2002], “Die europäische und die asiatische Seidenindustrie 1860–1930: Modernisierung und Weltmarkteinbindung der Rohseidenproduzenten China und Japan im Vergleich”, *Geschichte und Gesellschaft*, 28. Jahrgang Heft 1.

~~~~~

\*本稿は、平成16年(2004年)1月15日に熊本学園大学7号館721教室で、熊本学園大学産業資料館の開館記念セレモニーの一環として行われた、筆者による講演「熊本における『産業革命』」をもとに執筆したものである。大筋は変えていないが、当日の講演と異なるところや大幅に加筆したところがあることを断っておきたい。改めて、熊本学園大学産業資料館の移築にご協力頂いた方々、寒い中、筆者の拙い話を聴講下さった皆様に心よりお礼申し上げます次第である。